

## 宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第6話

### 傾国の美女楊貴妃と玄宗皇帝 中国

1972年田中角栄首相・大平正芳外務大臣が訪中し、日本と中国の国交正常化になった。当時、中国は文化大革命の最中で国内は混乱していた。民間の交流が始まり日本生産性本部や社会経済国民会議が経済界・労働界・学界のオピニオンリーダーを編成し中国へ視察団を送った。中国からも一カ月、長期では一年に及ぶ企業研修や地方視察など様々な課題をもった各界のリーダーたちが来日した。



楊貴妃の人形

1987年社会経済国民会議が労使混成の訪中団を編成し、そこへ参加した。ベールに包まれていた中国の実情を、首都北京はじめ地方都市を視察しながら垣間見たが、なかでも強く印象に残ったのは西安（かつての唐の都長安）であった。西安でのホテルは巨大な“人民大厦”であった。幾度かホテルの売店に通ううちに、米粉を使って指先で器用に人形を作っている親父と親しくなり、記念にわずか5、6cmのミニチュアの“楊貴妃”をもらった。

こゝ西安はかつての華やかな唐の都である。現在でも周りは頑丈な城壁（唐時代の城壁をもとに明代に完成）に囲まれている。古代ローマの城壁よりさらに頑丈で立派だ。西の大きな城門をくぐるとシルクロードへと道は続く。

こゝ西安はかつての華やかな唐の都である。現在でも周りは頑丈な城壁（唐時代の城壁をもとに明代に完成）に



現代の西安を囲む城壁は今に残る



巨大な城門

多くの詩人が長安やシルクロードを

題材に優れた詩を詠んでいるが、美しい旋律で語られる漢詩の中で、特に玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスを物語る白居易（字は白樂天）の長恨歌に魅せられ、遂にはあの長い詩を暗唱できるまで読み込んだ。

白樂天は楊貴妃の死後 50 年を経て長編の漢詩長恨歌を詠んだが、唐の最も華やかな時代を描いた長恨歌は歴史そのものを語っているような思いがする。

訪中の折、西安からそう遠くない、玄宗と楊貴妃のロマンスの舞台の一つである温泉場の華清池を訪ねた。1987年中国はまだ貧しく、人々は黒か紺色の人民服姿が普通で、各種遺跡なども整備



されておらず、華清池も始皇帝の兵馬俑もごく一部しか発掘されていなかった。長恨歌の中に「春寒うして浴を賜う華清の池、温泉の水滑らかにして凝脂を洗う」と云うくだりがある。

#### 温泉場・華清池

当時楊貴妃が入浴したあたり一帯は、掘り出されたままで泥田の様であった。この光景を見ていて栄誉栄華のなれの果てを見る思いで物悲しい気持ちになった。

それから七年を経た1994年に再び訪れたときには、泥沼だった現場は観光客のために整備され、周辺には建物がびっしり建てられ、もはや七年前の面影を残してはいなかった。楊貴妃の浴槽は立派な建屋になり、湯船にはバラかダリヤの大輪の花が敷きつめられ華やかに飾られていた。



泥田の中の楊貴妃の浴槽（1987年）



浴槽への入口と建屋（1994年）

西安には古い時代の石碑を、中国全土から集めた「碑林」と額のあがった貴重な博物館がある。そこに玄宗皇帝の直筆の石碑がある。玄宗皇帝は優れた統治能力を持った皇帝で、唐の最も繁栄した時代をおさめた。石碑に彫られた玄宗の字は、几帳面で実に律儀な人の字だとしみじみ眺めた。その皇帝が傾城の美女楊貴妃にのめりこみ、政務をおろそかにした。そして遂には楊貴妃ともども



玄宗皇帝の直筆（西安碑林）

寵愛した胡人の安祿山に追われ挙句には最愛の愛妾楊貴妃を失うこととなる。玄宗は都長安を後に、乱から逃れる途上側近である宦官の高力士の進言で、やむなく楊貴妃を殺め遺骸を馬嵬坡に葬った。

伝聞では最初土饅頭だった楊貴妃の墓は、後世美女にあやかる為に土を持ち去る人が後を絶たず墓全体を石で覆ったのだそうだ。

日本の大泥棒、鼠小僧の墓は両国の回向院にある。その墓石を削っていく同業の人がいると聞いて洋の東西を問わず人間の考えることは皆同じだと笑いがこみ上げた。

中国の三大美女といえば西施・王昭君・楊貴妃の名が挙がる。わが国では世界の三大美女といえばクレオパトラ・楊貴妃・小野小町と言いつつ慣わされているが、小野小町は平安時代の歌人だがこれは日本人の鼻疽の引き倒しだろう。

中国の王朝の中でも文化的にも経済的にも繁栄し、安定していた唐の時代（618年～907年）は三百年間にわたり続いた。大帝国唐は広大な地域を支配し周辺諸国に政治や諸制度、文化に多大な影響を与えた。わが国も遣唐使を送り唐の文化の吸収に努めた。日本の奈良時代から平安時代にかけての頃である。

文化面での唐は詩文の世界で杜甫や李白といった大詩人を生み出すなど大きな功績を残している。また中国の四大発明と称される、印刷・羅針盤・火薬・紙についても唐の時代が関わっている。玄宗皇帝の治世は華やかな唐の絶頂期に当たる。玄宗の前半生は開元の治（玄宗の治世29年間を言う）にみられる見事な為政者としての役割を果たして来たが、楊貴妃を迎え溺愛することによって次第に政治への関心と熱意を失っていく。

時に玄宗皇帝五十六歳、楊貴妃二十二歳であった。玄宗が政治への意欲を失い、変わって楊貴妃の縁戚一族が次第に権力を持つこととなり、楊貴妃のまた従兄弟の楊国忠が、ついには宰相に上り詰め政治を司ることとなった。

玄宗皇帝と楊貴妃が寵愛した中央アジアの胡人である安祿山と楊国忠は、互いに反目し対立しつつには安祿山が謀反を起こして兵をあげた。世にいうこれが安史の乱である。玄宗皇帝は楊貴妃はじめ楊一族を連れて都長安を脱出する。ところが権勢を極めていた楊一族に、日頃から不満を募らせていた玄宗の兵たちは、楊国忠以下楊貴妃の親族を誅殺することを要求し、やむなく次々殺害されていく。

そしてついには楊貴妃をも殺せとなり、その害は玄宗皇帝自身にも及ぶかにみえた。そこで皇帝の側近である宦官高力士が進言し高力士自らの手で楊貴妃を殺めた。

その後玄宗皇帝は乱が治まった長安へ戻ったが、三十人いた息子の一人が帝位につき、玄宗自身は軟禁状態におかれ、数年の後寂しく世を去ったのである。

白楽天の詠んだ長恨歌は美しく、物悲しく、むなしい人間のサガを私たちに教えてくれる。

(1994年)